チェンソウ！

逢川みず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チェンソウ！

【Ｎコード】
Ｎ８９３０Ａ

【作者名】
逢川みず

【あらすじ】
日本史上最悪、最低といわれた殺人鬼田中五郎。通称ジェイソン。１０年の沈黙を破り脱獄を果たしたジェイソンは夜の森で人間に出逢う。実は彼らは、ちょっとやばいサバイバルゲーマーだった！獲物はどっちだ！？殺るか、殺られるか！！田中にとって最悪で最低で最高の一夜が今はじまる。

脱出（前書き）

４＆４Ｋ先生の『小説のヒント』を元に作成しました。
あらためて素敵なネタをくださって、ありがとうございました。
小説が未熟なのは、４＆４Ｋ先生のせいじゃありませんので。

脱出

日本史上最悪最低といわれる殺人鬼、田中五郎。
彼が初めて破壊したのは、妹の赤いビーチボールだった。
祖父が所有している山で、竹林に無骨な様で転がっていたチェーンソーを手に取り、ビーチボールを切り刻んだ。いや、掠っただけだった。その微かな接触で、ビーチボールは弾け飛んだのである。赤いビニールの繊維が弾け飛び散った。
彼は今でもその光景をありありと思い浮かべることができる。
それから、ビーチボールは水風船になり（水は赤い絵の具で染められていた）、水風船は獣になって、そのうち人間になった。
たったそれだけのことだ。
田中五郎にとっては。
人間の飛び散る水は、彼が想像していた赤よりも赤黒かった。鮮血が好きだった。どの血液型の人間を破壊すれば綺麗な赤が飛び散るのか、身体のどこから破壊すれば綺麗に鮮血が吹き出るのか、そんなことを繰り返し試しているうちに、田中は捕まっていた。
塀の中。
こうして田中は綺麗な赤が弾けて飛び散る感動的な一瞬を見ることができなくなったのである。

もう１０年が経つ。

外界から祭拍子が漏れ聞こえていた。
鉄格子の隙間から見える月が赤い。朝食のとき、卵に鶏の血が一筋混ざっていた様を連想する。
かちゃ、かちゃん、ぎー……

もう何度耳にしたかわからない記号のような金属音がして、看守が見回りにくる。お決まりの時間だ。
房に田中はひとりだった。
田中の棲む房は、S級と呼ばれる極悪人専門の房で、つい1ヶ月ほど前までいた同居人はある日房から出され、そのまま戻ってこなかった。おそらく死刑になったのだろう。
「なあ、看守さん」
規則正しい足音は止まることなく、応じる声も聞こえなかったが、田中は気にせず喋る。
「今夜はさ、お祭りなんだな。楽しそうな人間の笑い声が聞こえるよ」
「……深々祭りです」
田中はニヤリと笑う。
「年一度の村のお祭りですから、賑わっているんでしょう」
この声は、最近房に出入りしはじめたばかりの若い看守だ。田中はあぐらをかいていた足を解き、冷たいコンクリートの床に手のひらをじりと貼り付けた。
「なあ、看守さん」
「……なんでしょう」
「オレの死刑はいつ執行されるんだ？」
「……」
「言っちまいなよ。オレには家族も親しい人間もいない。全員オレが殺したからな。そんなオレにつまんない気なんて使わなくていい。」
「……わかりません。」
「なに？」
聞こえないぞ、というように耳を傾ける仕草をする。看守が田中の房に寄る。
「上からの命令は、いつも突然で、僕たちの知るところではないのです。」

「じゃあ、1年後かもしれないし1ヵ月後かもしれないし……明日かもしれない。わからないわけだ。」
「……そうです。」
そうかよ。
田中は再びニヤリと笑った。笑って、看守が房を離れる、そのコンマ5秒前に、隠し持っていたカッターで看守の腕を切りつけた。
「うわ！」
看守があわてふためいて尻餅をつきそうになる。鉄格子から看守の腰に、鍵がぶら下げてあるホルダーに指をかけた。その全てが一瞬の動作。
「あ、なにを！」
ホルダーをカッターで裂くと、鍵束が滑り落ちた。一寸も無駄のない動きで、房の鍵を開け、尻餅をついている看守を見下ろした。
「あばよ」
「うひっ」
恐怖に目を見開いていた看守の腕に今度は深く切りつけた。田中は房を潜り抜け走る。
すべては狙い通り。
村一度の祭りの為に、監獄も人手が借り出され、警備が手薄になる。この絶好の機会。
ただ最初の機会は見送った。次の次の、次も……ずっと我慢し続けた。そして10年後の夜、とうとう看守たちは油断したのである。
鉄格子の外に偶然落ちていたカッターをうまく拾い上げた田中五郎は、ついにチャンスをものにしたのだ！　まさに奇跡的な脱獄！！
「あはははは、ひーひひひっひっ」
独房を出るとこらえきれず笑い声が漏れた。
なおも田中は走り続けた。
丘を駆け上がったところで、灯が賑わう村の中心部を見下ろす。いっそ村中の奴らを皆殺しにしようかとも思ったが、愚かな行為だとすぐに気が付く。街まで逃げればもっと沢山の人間を殺せるのだ。

丘の向こうには森の木々が鬱蒼と広がっている。
一晩、森で夜を明かすことにした。
が、そこで予想だにしないことが起こる。
「あ」
森に足を踏み入れようとしたところ、その一寸先で、ぱきり、と小枝を踏む音がした。
今宵は満月である。
満月の光は、その存在をぼおっと浮き上がらせた。
微かな風に靡く肩までの髪。女か。いや、身長が高すぎる。手足が長い。
「あ」
と、もう一度、その影はいう。そして、
「うきゃあああ！！」
田中の姿を認識すると悲鳴を上げ、森の中へものすごい速さで消えていった。
「……」
鼓膜を突き抜けるような悲鳴に驚き、しばし立ち尽くす。だが、１０年ぶりに外界の新鮮な風にあたり、頭の中はすぐに冴えていった。
つまり、こういうことだ。
田舎の森に逃げ込んだ殺人鬼。そして、男かは女かはわからないが人間がひとり。
「殺しには絶好のシチュエーションだな……」
呟いて、心臓がどくん、と跳ねた。
月光にカッターナイフがギラリと光る。
獲物！　獲物だ！！
まさに田中五郎に殺されるべき現れた獲物！！
「うおおおおおおおおおおお」
ただ赤く綺麗な血が飛び散る様が見たくて脱走した殺人鬼は、とてつもない高揚感を抑えきれず雄叫びをあげた

うおおーーーーん

呼応するようにどこかで野犬が鳴いた。

to be continued.....

脱出（後書き）

サバイバルゲームについての知識は、はったりと俄か知識なので、あまり突っ込まないでください（涙）

戦友

「ね、今夜のゲーム参加者って何人？」
呼吸をきらして現れた長身の少年。
セーフティーゾーンで熱いミネラルウオーターを飲んでいた氷山ルルは呆れて答える。
「何人って、ここにいる４人でしょうが。ていうか、アンタちゃんとゴーグルしなさいって。目ん球に当たっても知らないわよ」
「大丈夫、オレに弾は当たんないから。４人、４人だよね。うん、ルルと碧水と権藤さんとあの人。うん４人か。」
長い指を折って数える三崎楽（みさきらく）。サラサラした長めの髪が彼の大きなリアクションの度に揺れている。
月光が明るい。
「ちょっと待って。私とアンタと権藤さんと碧水さんの４人でしょうが。『あの人』って誰よ？」
「……え、誰だっけ？」
ひゃひゃ、銃を弄っていた小柄でサングラスをした男が奇妙な笑いを漏らす。
「また訳わかんないこと言い出したか、この坊ちゃんは～」
「ちっげーよ、馬鹿にすんな碧水！　あの人がいたんだよ、あの人が！！　今にも殺しそうな感じでオレのこと見てた。」
「だからさ、あの人って誰よ？」
そのとき、何処からか『うおおおおおおおおおおおおお』と不気味な咆哮が聞こえた。
ルルと碧水は顔を見合わせる。
「この人だよ！　この人！！」
楽が腕を振り回して戦友らに訴えた。
「顔がさ、まるで白いお面みたいで、ジェイソン素顔でいけます！みたいな……なんか見覚えあったんだよね。なんだっけ……そうだ、

ジェイソンだ！　ジェイソンだよ！」
「ひゃはっ、ホラー映画の見すぎじゃね？」
「ちげーよ！！」
「……田中五郎？」
楽が、馬鹿にした表情の碧水に掴みかかろうとしたところで、もう一人、体格の良い男が呟く。
「へ？　権藤さん、田中五郎ってあのチェーンソーの？」
「ああ……でも、まさか。逮捕されたはずだぞ。」権藤は顎をさすりながら首を傾げる。「本当に田中五郎だったのか？」
「間違いないって。ほら、聞いただろ怪鳥みたいな声！　ジェイソンだよ！！」
「祭の村民らの声かもしれないじゃない」
「……それにしてはもう少し近い位置から聞こえた気がするな」
「森まで村人が来たっていうの？　深々祭はこの森の神を奉る行事だから、しきたりだかなんだか知らないけど、村人は朝まで森に入ってこないんでしょうが」
そして村人は祭が終わるまで外の人間を村に入れない。だから今夜の深々村は絶好の戦場なのだ、と。ルルが責めるように、今回のゲーム企画者である碧水を睨んだ。
「東京から何時間もかけて来て村に忍び込んだのよ」
「いや～、村人はありえない、と思うけどな。」
エアガンを弄りながら碧水は不満そうに返す。
彼らはサバイバルゲーマーだ。
週末を利用しては、手頃な戦場を見つけ、サバイバルゲームを繰り広げている。
サバイバルゲームとは、簡単にいえば、戦争ごっこである。本物の銃を模したエアガンで撃ち合う。あなたはバトルロワイヤル戦をご存知だろうか。
「殺人鬼がいるかもしれないんだ！　オレ、やだよ、こんな武器じゃ！」

風船ハンマーのおもちゃを振り回して楽が怒鳴る。バトロワ戦の場合、クジを引いて使用する武器を選ぶのだが、彼の場合、当たった武器がコレだったわけだ。はっきりいってドンケツのハズレである。
「というか、ゲームを止めるべきでは？」
渋めの声で権藤がいう。彼の武器は電動ガンで、あたりの部類である。ちなみに、氷山ルルが当たったのはコッキング式ハンドガン、碧水はガス式ハンドガンだ。どんな武器かといえば、コッキング式もガス式も電動ガンより『手間がかかるもの』、と考えていただければよい。互いに隠れであった途端バトルが始まり、倒した相手の武器を奪うことができる。
「止める？　冗談じゃないわよ。東京から何時間もかけて村に忍び込んだのよ！」
「ジェイソンが坊ちゃんの狂言だという可能性もあるしな」
「むかっ！　くそ、いいよもう、オレがジェイソンを生け捕りにしてやるよ！　そしたら信じてくれるだろ！？」
「風船ハンマーでか？」
「これでさ」
楽はナップサックの中から、自分のハンドガンを取り出す。
「うまく当たれば骨くらい折れるよ」
「あんたの武器はそれじゃないでしょ。ルール違反よ！」
「いや、一応もってた方がいいんじゃないか。一応ね。殺人鬼だって人間だ。オレらの武器は負けねえよ。」
はい。
骨くらい折れる、と楽は言ったが、本来ならばこれはおかしい話である。
というのも、サバイバルゲームで使用されるエアガンの威力は概ね１Ｊと規制されており、１Ｊ以下の威力ならば長袖・長ズボンなら痛さは感じられない。つまり、彼らは販売されているエアガンを自主改造して１Ｊ以上の武器にした、ちょっとイっちゃってるゲーマーの集まりなのだ。こっそり、ひっそり４人で行っているのもこう

いう理由があるのである。
「ただ、ジェイソンに遭遇したときだけ使っていいとする。オレらに使ったら、その時点でヒット扱いにするからな、坊ちゃん？」
「わかってらい！」
「じゃあ」事の成り行きを黙って見守っていた権藤が、Gショックの腕時計を見ながらいう。「予定どおり5分後、再開ってことでいいか？」
4人のゲーマーらは顔を合わせて頷きあう。
「じゃ、殺人鬼がうろついてるようだから気をつけて」
「よし！」
一声掛け合い、ルル、楽、権藤が森の闇に向かって散っていった。
碧水はひとりになると、自分のトランクケースを開ける。それは鍵つきで彼以外触れられないようになっている。
「へへ」
銃を迷彩柄ジャケットの内ポケットに放り込んでゆく。
ただしそれはモデルガンではなかった。すべて本物の銃である。
「坊ちゃんの話が本当だとすれば……こりゃあチャンスじゃねえかよ」
サバイバルゲームはあくまでゲームだ。フェイクの世界である。
しかし、今ここに史上最悪と呼ばれた殺人鬼が潜んでいるのだ。
実は、疑う素振りを見せながらも、碧水は三崎楽の話を疑っていなかった。
それどこどか、一番に信じていたのが彼である。ゲームの場所を決める為に、事前リサーチした際、この村にS級極悪犯罪人の監獄があるという情報を掴んでいたのだ。ネットでは其処にジェイソン・田中五郎が収容されている、とまで情報が流れていた。
「へへへへへへ」
ボンゴル戦争帰還兵である碧水は、久しぶりの実戦の予感に身震いする。
S&W357マグナムの撃鉄を起こし、碧水は不適に笑った。

「悪いが、坊ちゃん。ゲームで勝つのも、殺人鬼を生け捕るのも、このオレ様だ。いや、『生け』捕りにできるかはわかんねえけどな。ひひひひっ」

to be continued.....

誤解

サバイバルゲーマーらがゲームを再開した頃。
日本史上最悪最低と呼ばれた殺人鬼・田中五郎は感動的な再会を果たしていた。
「う、うお、うおあああ」
涙が出た。
月明かりにそれは鈍い光を反射して、田中の眼球をますます潤ませた。その相手は、木々に根元に見捨てられたかのように放置してある、チェーンソー！
あの、赤い鮮血の飛び散りとめくるめく日々を共にしてきた朋友！！
「やっだ、うそ、信じらんな～い」
オバサンかギャルみたいな言葉を呟き、興奮ぎみの田中はゆっくりとそれを手にとった。ずっしり重量感。スイッチを押したが、うまく動かない。
「くそ、くそ、くそ」
パチパチと何度もスイッチを押す。そして、ついに、
ういいいいいいーん！
「やった」
稀代の殺人鬼のパワーが通じたのか、チェーンソーの刃は回転しはじめた。切れ味も良さそうだ。
「うおおおおおおおおおお」
神がお膳立てしてくれてるとしか思えない。
奇跡が降りてきた感覚に、またも田中五郎は、漆黒の森に雄叫びを轟かせた。

『うおおおおおおおおおお』

「え、なに？」
氷山ルルは岩場に隠れていた。
岩場の前には獣道が通っており、誰かしら通る確率の高い場所だ。
その岩場は、女性のルルがかろうじて隠れられる隙間であり、しかも外からは死角になっている。
そこで敵をアンブッシュ（待ち伏せ）する作戦だった。
「なんなのよ、もう」
またも聞こえた男のものらしき叫び声にルルは愚痴る。
声は森の入り口の反対方向、森の頂上ら方向から聞こえた。つまり、これで村の祭り広場からのものだ、という可能性は消えたことになる。3人の戦友らのほかに、何者かがこの森に入り込んでいるのだ。
殺人鬼ですって？　ばからしい。
ルルにとって、サバイバルゲームは日常生活のカンフル剤のようなものだった。サバゲーがなければ、ルルの生活は中年女性の二の腕のように、張りなく垂れ流れるだろう。氷山ルルはまだ若く美しい。
二の腕の肉はピンと張っている。
かさ、がさ、かさ、
「！」
突如耳に入った足音に息をのむ。
がさ、がさ、がさ、ががさ
随分と荒い。そして、足音に混ざって荒い呼吸までしている。
コッキング式ハンドガンを構え、相手を見据える。全体は見えない。
誰だろう。
その戦闘服は三崎楽でも碧水でも、権藤でもなさそうだ。まさか……殺人鬼？　予感が胸をよぎる。
ルルはウエストに巻いたウエストポーチを探った。あるモノを取り出す。
過去に一度だけ、酔った勢いというやつで、彼女は碧水と寝たことがあった。そのことで、彼らに特別な愛情が芽生えたとかとかそういうことは全くなかったが、その際、碧水がルルに与えたものだ。

形はパイナップルに良く似ている。碧水は『可愛いだろ？　ルルーのカラダに似てると思わん？』と、セクハラめいたことをいってプレゼントと渡してきたグラネードランチャー。いわゆる手榴弾である。
音を立てずに岩場から出た。あいかわらず派手な足音を立てている何者かの背後を追う。
邪魔者は許さない。アタシのカンフル剤を零そうとするものは絶対に。
何人たりとも排除してやるわ。
ルルは手榴弾を握り締め、歩を進めた。

田中五郎は獲物を捕らえるべく森をさ迷っていた。
スイッチを入れると、チェーンソーは調子良く、愛すべき獰猛な唸り声をあげた。
しかしこの森は木が多い。森だから当然なんだけど。
ふと、田中は足を止め、チェーンソーを起動させる。
ういいいいいいん
そして、目前の太い幹に刃を差し込んだ。
「ふふふふ」
木片を飛び散らしながら、刃は相当な樹齢の木を破壊していく。だが、田中が見たいのはこんなのじゃなかった。
パッと飛んで散る赤い肉片と血。殺人鬼ジェイソンは絶望的に飢えていた。
木々に止まっていたらしい動物と鳥が逃げていく気配がする。
みりみりみり、と嫌な音がして、樹木はゆっくりと倒れていった。
めきめきめきめきごおおおおおおおん
満足げに田中は相棒を停止させた。
やはりチェーンソーの機能に問題はない。人間の何十、いや何百で

もいけそうな感じだ。
「ジェイソーン！！」
忍び笑いをもらしていると、不意に呼びかけられた。
振り向くと、背後８メートルくらい先に、銃を構えた人影がある。
ばかな！？　周りに人どころか動物さえ存在していなかったはず。
「しんみょうにしろよー！」
長い手足の肩までの髪。
森に入ろうとしたとき発見した獲物だとすぐに気が付いた。妙に声が幼い。とても若い。少年だ。
「……お前、どこにいた？」
「うわ喋った！　こえ～！　じゃなくって、お前の頭の上にいたのさ！」
「上？」
「てめえが今倒した木に潜んでたんだって。よくも自然破壊してくれたな！　オレ、許さないかんな！！」
その、『な』がいい終わらないうちに、田中の頬をなにか鋭いものがすり抜けていった。
数秒遅れで、頬に痛みが走る。指で拭うと血がついていた。
「次は外さねえぞ。おとなしくオレに生け捕りにされるんだな、ジェイソン野郎め！」
ふりーず、と酷い発音でいい、近づいてくる少年。
倒れる木から、地上に降り立った少年。嘘だろ、と田中は思う。木は少なくとも１０メートルくらいの高さがあったというのに。恐ろしく身体能力の高い人間だ。
頭の中が整理できていない田中に、今度は逆方向から攻撃があった。
バーン！！
爆発音とともに足元の枯葉が舞う。
「へきすい！」
少年の高い声が響く。
「なにしてんだよ、邪魔してくれるんじゃねえよお！！　つーか、

なんだよその銃？　本物じゃん！？」
フリーズ、と背後からも威嚇され、殺人鬼はチェーンソーを持っていないほうの左手を挙げた。
「ひゃは、ほんとにチェーンソウ持ってるんだな～」
間の抜けた笑い声がした方向を見ると、ハンチング帽にサングラスをかけた男が銃口を向けて立っていた。
「田中五郎サン？　貴方、脱獄してきたんだね。でも、どっちみち貴方は死刑になるご予定の人なんだよ。オレがネットで掴んだ情報によりゃあ、一週間後にね」
「……」
「だけどさ、安心しなよ。オレがその前に、楽に死なせてあげるよ」
かちっ、と撃鉄を起こす音。
なんだ、なんだ！？
なんなんだコイツら？
殺人鬼は凄まじいショックに襲われていた。
殺人鬼には逃げ惑うか弱き人間、が付き物と相場が決まっているのに。こいつら何者？
もしやＳＷＡＴ！？　逃亡してから、まだ数時間も経ってないのにもう海外から応援が来たのか！？
誰が見ても三崎楽と碧水は海外の精鋭部隊には見えなかったが、１０年も独房にいた田中は観察力と判断力は鈍っていた。
「あ、逃げた！」
あとはもうひたすら走った。
「待てー！！」
追尾してくる銃弾におびえながら、殺人鬼は涙と鼻水を垂れ流して逃げた。
「ちきしょおおおお！」

to be continued....

誤解（後書き）

だんだんメチャクチャになってきました。
次回はもっとメチャクチャです。

花火

「おりゃあああああ」
「があっ！」
「あ、権藤さんストップ！　ヒットしたって」
眩いライトに当てられて、楽と碧水は腰を抜かした。
「はい、どうぞ」
権藤がしりもちをついている二人に手を貸して起き上がらせる。
「あ、逃げちゃダメじゃないか、三崎くん。セーフティーゾーンに行っときなよ。二人とも、随分とあっさりひっかかったな。」
ライトでの目くらまし攻撃に成功した権藤は機嫌良さそうだ。
「というか、そもそも、なんでふたりで行動してたんだ？　ルルさんは？」
「しらね～よ。あいたた」
エアを弁慶の泣き所に受けてしまった碧水は迷彩柄のズボンを捲る。
「ひでえ、青タンになってやがる」
「あ、そうだ権藤さん！　ジェイソン見なかった？」
「へっ？　見てないけど」
「さっきまでオレらジェイソン追ってたんだ。奴さん、あんな重そうなチェーンソー持ってるくせに、やたら逃げ足早くってさ」
「いたのか……本当に」
権藤が感慨深げに唸った。
「一緒にヤツを捕まえようよ、権藤さん！」
「え、いや、しかしゲームが」
「もうゲームなんていまさらだろ？」
ジャケットから銃をひとつ取り出すと、碧水はそれを権藤に向かって投げる。イスラエル製のサブマシンガン、ウージーだ。手にとった途端、権藤は脂汗を流す。
「おまえ……これ」

「受け取れよ、本物だ。殺人犯なんだぜ。マジなんだぜ。やらなきゃやられんだぜ？」
「でも別に」
個人的な恨みがあるわけでもないし、相手はあのジェイソンだ。冷静な権藤はふたりを諭そうとしたが、断固として聞かない。
「オレさ、ジェイソンに恨みがあんだよね！」
三崎楽が腰に手をあてて大きな声を出した。
「どんな？」
「母ちゃんをアイツに殺されたんだ。」
「えっ」
「マジかよ、坊ちゃん」
「あ、母ちゃんっていっても友達の母ちゃんね。寅蔵の母ちゃん。」
「……なんだよ。びっくりさせんなよ」
「なんだとはなんだー！！　寅蔵の母ちゃんはな、料理うまくて美人ですげー優しかったんだぞ。あんな良い人を、ジェイソンは破壊したんだ。オレ、アイツを許さないよ！」
「……いこうか」
権藤が設置したライトを取り外していく。
「おっ、わかってくれたか、権藤さぁん」
「というか、ルルさんが心配だ。我々がここにいる限り、彼女はひとりだからな」

氷山ルルは単独で怪しい男を尾行していた。
「はあっ、はあっ」
その男は全身灰色の服を着ており、いかにもそれは囚人服っぽい。
「どこいった、まてえ」
ときどき不気味なうわ言を漏らしている。ルルは確信していた。
間違いない。あれが、稀代の殺人鬼ジェイソンなのだ。獲物を探し

て森をさまよっているに違いない。
ルルにとって、ジェイソンの連続殺人事件はあくまでテレビの中の出来事だったが、無残に殺されていった人々の気持ちを思うと、迷うことなくジェイソンを憎むことができた。即席の殺意である。
いい機会だわ。
どて、とドジな音がした。ジェイソンが木の根にひっかかって転んだのである。
「痛ってええええ、くそ」
背を丸めて呻いている。とっても痛そうだ。
チャンス！　ルルは手榴弾の引き金を歯で銜えると、大木に凭れかかり、タイミングを計った。1，2，3，4、
「いた！！　ルルさああん！」
「！」
とんでもないハプニングが起こった。
三崎楽が手を振りながらこちらに向かってくる。このときほど、このガキを殴りたいと思ったことはない。
そして、その身長だけデカい阿呆のせいで、ジェイソンにこちらの存在を明かしてしまったのである！　なんたる失態！！
背を丸めていたジェイソンは、ぎろり、と首だけ後ろに回した。
「こんばんは……あの、あなたは？」
「……」
意外と普通の言葉をかけてきたジェイソン。
ルルは引き金を抜き、静かに手榴弾を転がした。あとは背中を向けて全力疾走である。
「殺した人たちに地獄で詫びな！」
「あ、なんで逃げるんですか！　僕はこの村にある牢獄の看守です！　田中五郎が逃亡したので捕まえに」
「えっ、は？」
どおおおおおおん

煙が天に登っていく。
「ルル！？　なんだこりゃあ、どうなってんだ」
いつの間にか碧水と権藤もやって来ていた。
「ルルさんがやったんだよ。すっげえ、今のって手榴弾？」
「……楽、聞いた？」
「へ？」
「最後の言葉。アタシの気のせいだと思うんだけど、ていうか絶対空耳なんだけど、あの男『自分は看守で脱獄した田中五郎を追ってきた』って、いってなかった？」
ええっ、と権藤が目を見開く。楽は、ははっと笑って答えた。
「ああ、言ってた言ってた。オレ耳良いもん。空耳じゃないよ」
絶望したかのように崩れ落ちるルル。
「ひでえや。死んだな、こりゃ」
黒い煙の中から碧水の間抜けた声が聞こえてきた。

「うふふ……やっべ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．．

正義

「さて、どうする？」
満月が雲隠れした。
人工的なライトに照らされた４人の男女が浮かび上がる。
「ま、どうするっていっても、道はひとつしかないと思うけどね～」
「ルルさん逮捕されちゃうの？」
腕組をしながら喋る碧水に、三崎楽が首をかしげて問う。
「普通に考えりゃされるだろ。人殺しなんだからさ」
「その前にひとつ」
厳かな口調で権藤が制す。
「アレは本当に看守、なのか？　この森にいるのは俺たち４人と殺人鬼だったはずだ。アレが」少し離れたところに倒れている、黒く焦げたもの言わぬ男を指差す。「ジェイソン……田中五郎だということはないのか？」
「残念ながら、ポケットからこれを見つけた。」
碧水がＩＤカードを突き出す。精悍な顔つきの写真の横に、深々村監獄看守『藤夜タケル』とあった。
「……悦い男。殺す前に一回寝ときゃよかった」
おぼつかない様子のルルが冗談ともつかないコメントを漏らす。
「やだなオレ、ルルさんが逮捕されたらさ」
「なんで？」
「だって、サバゲーの仲間が３人になっちゃうじゃん。３人じゃつまらないよ」
「違うだろ、坊ちゃん」
「なんでだよお！　４－１は３だろ？」
「そういう意味じゃない。権藤の旦那がおっしゃったじゃねえか。此処には殺人鬼とオレら４人だけなんだ。死体があったら、誰だって殺人鬼が殺したと思うだろ？」

にや、と碧水は口の端を吊り上げて笑う。
「その為には口封じが必要だ。」
「……やっぱり田中を殺す気なんだな？」
「それ以外に方法があるか？」
タイミング良いのか悪いのか、ドブガエルが、ぐぶう、と鳴いた。
両生類が苦手なルルが飛び上がって怖がる。張り詰めていた空気が緩み、権藤が溜息をついていった。
「わかった。俺としても、ゲームが４人から３人になるのは耐えれない。ゲームってのは最低４人いて成立するものだ。田中五郎には犠牲になってもらおう。」
「ひゃはは、ご立派な理論だ。じゃ、行くぜ？」

『ひっ、ひっ、ふー。ひっ、ひっ、ふー』
走りすぎで眩暈がする。息もおかしい。喉が痛い。
かくして、命を狙われることになった殺人鬼ジェイソンこと田中五郎は、疲労困憊で何故かラマーズ法の呼吸を繰り返していた。
匍匐前進で移動している彼の視界には、微かなライトが灯っている。
そして４人の人間たち。
まさかこんなことになるなんて。
年一度の村祭りの夜、奇跡的な脱獄を果たしたジェイソン。お膳立てされているように揃えられた朋友（チェーンソー）、獲物……しかし獲物は獲物でなく恐ろしい武器を持つ野蛮人だった。
もう、逃げるしかないな……山を下りるしかない。ちっ、情けねえ。
野蛮人がその場から散ったら、彼らとは遭遇しないようなルートで森の出口を目指すつもりだ。
『やっぱり田中を殺す気なんだな？』
「！」
微かな風にのって、そんな言葉が聞こえてきた。

『それ以外に方法があるか？』
違う男の声。
やばい。やばすぎる。田中ってオレのことだろ？
彼らがその場を離れるのを待つのさえ恐ろしくなったジェイソンは匍匐前進のまま、その場を離れようとした、そのとき、
「ぎょっ」
悲鳴にならない声を漏らす。
その進もうとしたすぐ側に人間が横たわっていた。黒焦げで……たぶん生きてはいない。爆弾か何かにやられたっぽい。ジェイソンはすぐに悟った。
奴らの仕業だ！
「……マジ半端ねえな。人間のクソだ。」
ぞく、と背筋を震わせ、ジェイソンは再び匍匐前進をはじめた。

「大丈夫かイ」
顔色が悪い氷山ルルに碧水がいう。
あれから、二手に分かれてジェイソンを挟み撃ちしよう、ということになり、権藤と楽、碧水とルルがそれぞれ殺人鬼を探しながら森を走っているところだった。
「大丈夫だって」
手を差し伸べてきた碧水を振り払って、ルルは額の汗を拭う。
「強がんなよ。わかってんだぜ、お前は優しい女だからな……最初にサバゲーに誘ったときだって、絶対にのってこないと思ったもんな」
「……どうして？」
「なんかよお、虫も殺せないっていうか、命を大切にしようとか、毎日教会で祈ってます、みたいな？　そんな印象だったよ、ちょっと前のルルは」

「命を大切に？　あのねえ、命なんてね」
聞き返してルルはぷっと吹き出す。そして、向かいの男を睨みながら返す。
「超大切にしてるわよ！　超大切にしてるわよ！！」
「声でか。ていうか、繰り返さなくても……」
「サバゲーが終わって、あーアタシ生きてるなって実感して、感動して、祝福して、そしてアタシは月曜からまた仕事に行くの！　それがアタシの正義よ」
「ふ、ふうん」
ご立派な正義だ、と圧倒されつつも碧水は笑って流す。
「オレにとって、サバゲーはやっぱ、ただの暇つぶしかな。ゲームはゲームだ。実戦とは違う。実践とは違う。」
「……繰り返さなくていいわよ」
「繰り返しじゃねえよ？」
そのとき、かちっ、と。
妙に耳に心地よい音が響いた。ルルはアーモンド型の瞳を大きくする。
その眼球には、こちらに銃を向けて構えている碧水が映っていた。
ゆっくりと寄ってくる。
「結局さ、ボンゴル戦争帰還兵のオレとお前らじゃ違うんだよ。実戦と実践を知っちゃってるオレとお前らじゃさ。」
「あ、あ……」
「仲良くやれなくて残念だ」
森の高い天に銃声が響いた。
「……言っただろ？」
もの言わぬ骸となったルルの頬をなでる。
恍惚とした表情で呟いた。
「此処には殺人鬼とオレら４人だけなんだ。死体があったら、誰だって殺人鬼が殺したと思うだろ？　な？」

to be continued.....

バン！

満月の森に銃声が響き渡った。

「権藤さん、今の！」

殺人鬼ジェイソンを挟み撃ちにするため、碧水・ルルチームと二手に分かれていた三崎楽・権藤のチームは立ち止まり顔を見合す。

『や、やられた』

緊急用の無線から碧水の声が流れてきた。

権藤はベルトに備え付けていた無線機を口元に取ると、すぐに返事をする。

「どういうことだ？　無事なのか？」

電波が悪いのか、しばし雑音だけが聞こえた。じじ、じじじじ、

『ルルが、ルルがやられた。』

ひっ、と楽が喉を鳴らした。

『一発撃ったけど、当たらなかった。もう許せねえ、アイツはセーフティゾーンの方へいった。そこへ向かってくれ。挟み撃ちにするんだ。』

「了解」

ぶつ、

そこで無線は切れた。

「権藤さん、ルルさんがやられたって！」

「……とりあえず、碧水の指示に従おう。」

「ひゃはははは、ひひひひ」

碧水は両手にマシンガンを抱え、森を疾走していた。

氷山ルルを撃った右手はいまだ震えている。恐怖ではない、歓喜で。
『人間は所詮、動物だ。』
ボンゴル戦争時、隊長の言葉を思い出す。
隊長は敵兵を滅茶苦茶に殺し、食料難で苦しんでいるわけでもなかったが、死体を捌いて焼いて兵士たちに無理やり食べさせた。
他の兵士たちが吐き気を堪えるなか、碧水はある種の感動さえ覚えて人肉を屠った。
『殺しあって奪い合う。平和とか仲間なんてクソ食らえだ。何千年も繰り返してる習慣をどうして今更覆そうとする。いいか、狂ってるのは今なんだ。見てろ、いまにすぐ時代は戻る。殺しあって奪い合う時代にな』
人間の本能。
本能に抗ってどうする？
殺人鬼との遭遇で、碧水の思考は完全に暴走していた。人間の理性や道徳が残らず引っこ抜かれてしまったかのような、野蛮の顔つき。口からは涎を垂れ流している。
「ひひひ、見てろよ。ルルも坊ちゃんも権藤の旦那も殺人鬼も、オレが殺して捌いて晒して骨までしゃぶってやるよ！」
もはや人間離れした動きで、大木によじ登る。
息を潜めて『獲物』を待った。おびき寄せていた獲物。やがて、暗い森を近寄ってくる気配が聞こえた。
「ひひひ」
碧水はマシンガンを構える。的には三崎楽のまだ子供くさい顔がしっかりと定められている。引き金をひいた。
「ひ、ひ？」
そのとき、木の枝に登っていた碧水のさらに上から何かが降りてきた。
ぶいいいいいいーーーん
何万という蜂の羽音のような轟音。
碧水の視界は、その鋭い凶器の銀色に染まり、すぐに赤色に染まり、

そしてそこで彼の意識は永遠になくなった。

どさり、と目の前に何かが落ちてきた。
それには手があって足があって、どうやら人間のようだった。
しかし首から上がなかった。
「あ、ああ、」
突然現れた、その物体に権藤と楽は立ちつくす。
どさり、
数秒後遅れて頭が落ちてきた。見慣れたサングラス、見慣れたバンダナ。
「へきすい！！」
楽が叫ぶ。
しかし、楽も権藤もその碧水だったモノに、それ以上近づくことはできなかった。それくらい、ソレは凄まじかった。
「しっ」
悲鳴を上げそうな楽の口を権藤は手のひらで塞ぐ。
違う腕は銃を構え虚空へ上げられている。銃口の先には大木がある。
その大木のなかに、蠢く黒い影があった。
影は愚鈍な動作で蠢いている。どうやら木を降りようとしているらしい。
「……権藤さん」
耐え切れずに楽が権藤の腕を掴む。銃を構えている権藤は対象から銃口を逸らさずに、そしてその銃口は少しずつ降りていき、ついに真正面へ向いた。
大木から下りたった影は月光に照らされる。
ぼさぼさの髪。能面のように青白い顔。囚人服の袖から出ている白い腕には無骨な凶器が握られている。チェーンソー。
殺人鬼ジェイソン。

「お前が……お前がやったのか？　ルルさんも、碧水も」
「……」
楽の問いに殺人鬼は答えない。無言のまま、チェーンソーのスイッチを入れた。
ぶうううううん
「三崎くん」
懐に手を差し込んで一歩前に出た楽を、権藤は引き止める。
「権藤さん、オレひとつ嘘ついたんだよね。」
「三崎、」
「友達の母さんがジェイソンに殺されたって、あれ。実はさ……寅蔵の母ちゃんなんかじゃなくてオレの母ちゃんなんだよ。」
権藤が一瞬、楽を引き止める腕の力を緩めた。
それを見逃さずに楽はさらに前に出て、真っ直ぐに銃を構えた。
「だから、オレがコイツ殺したってなんも悪くないんだ。そうだよね？」
ジェイソンは身じろぎもしない。
三崎楽は下唇を舐めると、静かに引き金を引いた。
「じゃあね、バイバイ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．．

結末

目前の少年が銃の引き金を引く。
その直後、ジェイソン・田中五郎は前に走り出した。
逃げずに真っ向面へ。
三崎楽は、その動作を予想だにしていなかったのか、弾丸は田中の脇腹を掠っていったものの第2弾は飛んでこなかった。
「うわあああああ」
恐怖に引きつらせた顔の楽が叫んでいる。
が、田中の視線はもっと先にあった。楽と権藤、2人組のさらに先へ。
「田中ーーーーーっ」
狂気にみちた咆哮。
いくばくかの間を置いて、田中はその『人物』と向かい合う。
「あ！あ、ああ、あの人って」
怯えた声。無理もない。
田中が対峙している男は、全身が真っ黒でとても生きている人間に見えなかった。黒焦げの人間。
「うおおおおおおっ」
黒こげ人間は両腕を上げ、再度雄叫びを上げた。
「あ、あれって、ルルさんが殺した、」
看守！
田中五郎を牢獄から追ってきた看守！！　彼は氷山ルルの勘違いで手榴弾の直撃にあったのだ。とても生きている状態には見えなかった、のに
「生きてたのか」
権藤が呟いた。その額には脂汗が浮かんでいる。
「……生きてはないさ」
ゆっくりとした口調で。

しわがれた老人のような声が喋る。
「田中、お前は気が付いてなかったのか」
「……」
ジェイソンは探るような表情をしている。
「やっぱりな。俺は、お前を殺すために看守になったんだぜ。なぜかわかりますか？」
「……」
「なぜなら俺はお前に殺されたから」
ぐち、
グロテスクな音がした。黒こげ男の腕がもげ落ちたのだ。
「あーあ、お前に腕を切られたのを忘れてたよ。ま、いいさ、こんなのすぐにくっつく。」
そういうと、腕を放り投げた。
楽と権藤の前にそれは落ちる。その腕の断面からは、何本もの血管……ではなく管が伸びていた。機械的な配線。
「……アンドロイド？」
「そうさ。俺は田中に殺されて、機械人間にされちまったんだ。身体を切り刻まれて、それでも俺は死ななかった。なぜだかわかりますか？」
看守が視線を楽と権藤に向ける。
「コイツのせいさ。人間をどれくらい生かしながら破壊できるか、なんて馬鹿げた実験のせいで、俺はぎりぎり死ねなかった。脳だけ移植され、こんな身体にされちまった。俺は自分の手でお前を殺すために看守になって機会を狙ってたのさ！」
もげた腕の断片を指差して看守は叫ぶ。
「お前らは、自分のグチャグチャにされた肉体を見たことがあるか？　赤い海が広がって、腕も足もなにもないんだ。動かそうとしてもなにもないんだ、無なんだよ！」
「っ」
一瞬、楽は何が起こったかわからなかった。

隣にいたはずの権藤が吹っ飛ばされて木の幹に打ち付けられる。すぐに動かなくなった。声も出さずに。楽は看守を見返す。その手には拳銃が握られている。
「……なんで」
「邪魔されたくないんでね。ギャラリーはいらないんだ。」
「ふざけんな……ふざけんな！」
看守は楽を無視して、銃口を田中に向ける。
「田中さんよお、どうして俺が応援も呼ばずに脱獄したお前を追ってきたかわかるか？」
「……」
「というか、逃がしてやったことに気づいてたのかな。
全部、お前をこの手で殺す為さ。どうやら想定外の遊びをやってる人間どももいるようだし、なにより稀代の殺人鬼がいらっしゃるんだ。死体がごろごろ転がってたって、ちっともおかしくない状況だ。」
「……」
『なんだ、なんだ』
森の入り口の方向に微かな灯が見えた。集団の騒がしい声も。
祭りを行っていた村人たちが、ようやく森で繰り広げられている騒ぎを不審に思ったのか。
灯と群集が近づいてくる。
「ちっ、邪魔が入りそうだな。その前にさっさと終わらせてやる。まずはお前だ」
看守が三崎楽に狙いを定める。
「……赤い血」
「は？　ジェイソン、てめえ、、、」
田中が何かを口走った。つづく轟音。
楽は固く閉じていた瞼を開く。
赤い海が広がっていた。
「赤い血」

黒こげの死体は赤で塗れていた。看守は身体はもはや人間でない。
その血は碧水の血だった。それが、土の地面に広がっている。
唸りをつづけているチェーンソーが真っ二つの黒い死体の脇に転がっていた。
頭から足までタテに真っ二つになった死体に。
「……投げた？」
ジェイソンは武器を持たず、立ち尽くしている。チェーンソーを看守に向かって投げたのだ。それが悪魔の仕業のように看守の身体を引き裂いた。
「あ、ああ、ああああ」
「……赤いのが飛び散るのが好きなんだ。壊して吹き出て飛び散る赤い、」
まるでうわ言のように。
ジェイソンの視線は空をさ迷っている。
覚束ない足取りで動きっぱなしのチェーンソーを手にとった。
「血が飛び散るのが好きなんだ。俺もさ、」
『なにしてる！！』
村人たちが近くまで迫ってきた。静かだった森に群集の足音がひしめいている。
「俺も……綺麗に散れるかな？」
「あ、じぇ、」
殺人鬼はチェーンソーを自分の首元に当てると迷うことなく鋭い刃を肉に埋め込んだ。
鮮血がほとばしる。
「ははははっ、あーはっはっはっはははは！！」
まるでシャワーのように。
赤い水が。赤い、赤い、赤い赤いあかいあかいあかい……！！
楽はひたすら殺人鬼の血しぶきを浴びた。
その自らの血に塗れた楽の様を、妙に嬉しそうな表情で見つめながら、ジェイソンの首は胴体を離れた。

「うわあああああああ」
駆けつけた村人たちが惨状を見て悲鳴を上げている。

やがて赤色点灯の車が来て、楽は警官らに拘束された。
「あ、」
パトカーが出発する寸前、楽は声を上げる。
死んだと思っていた権藤がむくり、と起き上がったのだ。警官らに支えられて立ち上がっている。
「権藤さん！」
「……ああ、三崎くん無事だったか」
車から飛び降りて駆け寄る。
「あー、よく死んだよ」
権藤は、本人も忘れていたらしいが、極秘のルートから手に入れたおニューの防護服を身に着けていたのだった。
「すげえな、それ。今度オレも買おう！」
「行くぞ」
警官に腕を引かれる。
権藤とは別々に連行されるらしい。
「権藤さん！　また、遊ぼうね！」
楽は泣きそうな顔で叫んだ。
「また、ふたりでサバイバルゲームやろうよ！！」
権藤は少しだけ笑って頷いた。
楽を乗せていったパトカーが去っていって、権藤はもう1台のパトカーへ誘導される。
「すごいな……これで、人間を真っ二つに？」
「嘘だろ」
現場にいる警官らの声が聞こえてきた。
「これ完璧に錆びてるじゃないか。壊れて動かないぞ」
「これで……どうやって？」

ひたすらに首を傾げている。

深々森を照らしていた満月は沈みかけ、空は青白んでいる。
微かに顔を出した朝日に照らされ、血まみれのチェーンソーは不気味に光った。

ｔｈｅ　ｅｎｄ.

結末（後書き）

やっと書き上げることができました。
あらためて、原案をくださった４＆４Ｋ先生に声を大にしてお礼をいいたいです。
みなさまも、もしよろしかったらネタの思いつかない水乃に書いてくれてもいいよ、という原案がありましたらどうかご応募ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8930a/

チェンソウ！

2010年10月11日18時25分発行